

一日の劳苦

太宰治

青空文庫

一月二十二日。

日々の告白という題にしようつもりであったが、ふと、一日の労苦は一日にて足れり、という言葉を思い出し、そのまま、一日の労苦、と書きしたためた。

あたりまえの生活をしているのである。かくべつ報告したいこともないのである。

舞台のない役者は存在しない。それは、滑稽こっけいである。

このごろだんだん、自分の苦悩について自惚うぬぼれを持って来た。自嘲し切れないものを感じて来た。生れて、はじめてのことである。自分の才能について、明確な客観的把握を得た。自分の知識を粗末にしすぎていたということにも気づいた。こんな男を、いつまでもごろごろさせて置いては、もつたいない、と冗談でなく、思いはじめた。生れて、はじめて、自愛という言葉の真意を知った。エゴイズムは、雲散霧消している。

やさしさだけが残った。このやさしさは、ただものでない。ばか正直だけが残った。これも、ただものでない。こんなことを言っている、おめでたさ、これも、ただものでない。その、ただものでない男が、さて、と立ちあがって、何も無い。為すべきことが何も無い。手がかり一つないのである。苦笑である。

発表をあきらめて、仕事をしているというのは、これは、作者の人のよきではない。これは、悪魔以上である。なかなか、おそろしいことである。

くだらないことばかり言っている。訪客あきれて、帰り支度をはじめめる。べつに引きとめない。孤独の覚悟も、できている筈だ。^{はず}

もつともつとひどい孤独が来るだろう。仕方がない。かねて腹案の、長い小説に、そろそろ取りかかる。

いやらしい男さ。このいやらしさを恐れてはならない。私は私自身のぶざまに花を咲かせ得る。かつて、排除と反抗は作家修行の第一歩であった。きびしい潔癖を有難いものにした。完成と秩序をこそあこがれた。そうして、芸術は枯れてしまった。サンボリズムは、枯死の一瞬前の美しい花であった。ばかどもは、この神棚の下で殉死した。私もまた、おくれげながら、この神棚の下で凍死した。死んだつもりでいたのだが、この首筋ふとき北方の百姓は、何やらぶつぶつ言いながら、むくむく起きあがった。大笑いになった。百姓は、恥かしい思いをした。

百姓は、たいへんに困った。一時は、あわてて死んだふりなどしてみたが、すべていけないのである。

百姓は、くるしい思いをした。誰にも知られぬ、くるしい思いをした。この懊惱おうのう、有難う。

私は、自身の若さに気づいた。それに気づいたときには、私はひとりで涙を流して大笑いした。

排除のかわりに親和が、反省のかわりに、自己肯定が、絶望のかわりに、革命が。すべてがぐるりと急転廻した。私は、単純な男である。

浪曼ろうまん的完成もしくは、浪曼的秩序という概念は、私たちを救う。いやなもの、きらいなものを、たんねんに整理していちいちこれの排除に努力しているうちに日が暮れてしまった。ギリシヤをあがれてはならない。これはもう、はつきりこの世に二度と来ないものだ。これは、あきらめなければいけない。これは、捨てなければいけない。ああ、古典的完成、古典的秩序、私は君に、死ぬるばかりのくるしい恋着の思いをこめて敬礼する。そうして、言う。さようなら。

むかし、古事記の時代に在つては、作者はすべて、また、作中人物であつた。そこに、なんのこだわりもなかつた。日記は、そのまま小説であり、評論であり、詩であつた。

ロマンスの洪水の中に生育して来た私たちは、ただそのまま歩けばいいのである。一日

の労苦は、そのまま一日の収穫である。「思い煩わづらうな。空飛ぶ鳥を見よ。播まかず。刈らず。蔵に収めず。」

骨のずいまで小説的である。これに閉口してはならない。無性格、よし。卑屈、結構。女性的、そうか。復讐心、よし。お調子もの、またよし。怠惰、よし。変人、よし。化物、よし。古典的秩序へのあこがれやら、訣けつべつ別べつやら、何もかも、みんなもらって、ひつくるめて、そのまま歩く。ここに生長がある。ここに発展の路がある。称して浪漫的完成、浪漫的秩序。これは、まったく新しい。鎖につながれたら、鎖のまま歩く。十字架に張りつけられたら、十字架のまま歩く。牢屋にいれられても、牢屋を破らず、牢屋のまま歩く。笑ってはいけない。私たち、これより他に生きるみちがなくなっている。いまは、そんなに笑っていても、いつの日にか君は、思い当る。あとは、敗北の奴隷か、死滅か、どちらかである。

言い落した。これは、観念である。心構えである。日常坐臥は十分、聡そうめい明めいに用心深く為すべきである。

君の聞き上手に乗せられて、うっかり大事をもらしてしまった。これは、いけない。多少、不愉快である。

君に聞くが、サンボルでなければものを語れない人間の、愛情の細かさを、君、わかるかね。

どうも、たいへん、不愉快である。多少でも、君にわからせようと努めた、私自身の焦慮に気づいて、私は、こんなに不機嫌になってしまった。私自身の孤独の破綻はたんが不愉快なのである。こうなつて来ると、浪漫的完成も、自分で言い出して置きながら、十分あやしいものである。とたんに声あり、そのあやしきをも、ひつくるめて、これを浪漫的完成と称するのである。

私は、ディレツタントである。物好きである。生活が作品である。しどろもどろである。私の書くものが、それがどんな形式であろうが、それはきつと私の全存在に素直なものであつた筈である。この安心は、たいしたものだ。すっかり居直つてしまった形である。自分ながらあきれている。どうにも、手のつけようがない。

ひとつ君を、笑わせてあげよう。これは小声で言うことであるが、どうも私は、このごろ少し太りすぎてしまいました。

できすぎてしまった。図体が大きすぎて、内々、閉口している。晩成すべき大器かも知れぬ。一友人から、銅像スタチュ・ブレイ演技という讃辞を贈られた。恰好かっこうの舞台がないのである。

舞台を踏み抜いてしまう。野外劇場はどうか。

俳優で言えば、彦三郎、などと、訪客を大いに笑わせて、さてまた、小声で呟くことには、「悪魔はひとりすすり泣く。」この男、なかなか食えない。

作家は、ロマンスを書くべきである。

青空文庫情報

底本：「太宰治全集10」ちくま文庫、筑摩書房

1989（平成元）年6月27日第1刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版太宰治全集第十卷」筑摩書房

1977（昭和52）年2月25日初版第1刷発行

初出：「新潮 第三十五年第三号」

1938（昭和13）年3月1日発行

入力：土屋隆

校正：noriko saito

2005年3月17日作成

2016年7月12日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

一日の労苦

太宰治

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>